

年次	職業上の地位		大企業主	小企業主	自由業主	役員	役員	労働者	労働者	無業不詳	計
	大正二年	同三年									
同三年	二四	八三	二四	二二六・一	二四九・七	七三	一〇六・〇	四三三・九	四三三・九	二二五・四	一九〇・五
同四年	四七	四七	二四	二四三・八	二四三・八	二四	一〇四・三	四四一・四	四六三・九	一九八・六	一九〇・五
同五年	七九	七九	二四	二四三・七	二四三・七	九三	一二六・六	四六三・九	四九八・〇	一二七・三	一九〇・五
同六年	二四	二四	二四	二五九・七	二五九・七	六二	一〇三・九	四九八・〇	五三六・四	九四・七	一九〇・五

A 第四五號

死亡者職業上の地位分類表 (實數)

(體性別なし)

(死産を算入せず)

年次	職業上の地位		大企業主	小企業主	自由業主	役員	役員	労働者	無業不詳	計
	大正二年	同三年								
同三年	四	三	四	一三三	八	二九	二九〇	七五	五三九	四八四
同四年	三	一	三	一〇七	二	三三	二六九	六一	五三五	四八四
同五年	三	一	三	一三三	四	三五	二六六	七三	五〇〇	五〇〇
同六年	一	一	一	一六〇	七	四九	三〇八	六五	五九〇	五九〇
計	二	一	二	六八一	二六	一八七	一四〇九	三三四	二、六三八	二、六三八

A 第四六號

同

上

(比例)各年死亡千中各地位の占むる割合

年次	職業上の地位		大企業主	小企業主	自由業主	役員	役員	労働者	労働者	無業不詳
	大正二年	同三年								
同三年	七六	六三	七六	二二二・五	一五二	五四八	五四八・三	一四一・八	一四一・八	一四一・八
同四年	六三	六三	六三	二二二・三	四一	八六八	五五五・八	一三六・〇	一三六・〇	一三六・〇
同五年	六〇	六〇	六〇	二二六・〇	七五	五九八	五〇〇・九	一三六・五	一三六・五	一三六・五
同六年	一七	一七	一七	二七二・三	二九	八三一	五三三・〇	一一〇・三	一一〇・三	一一〇・三

右兩種の表に依れば、労働者は常に全居住者の約半數を占めて、その増加の様子も著しいものがある。之に亞ぐは小企業者であつて、殊にその大正四年以後に於ける増加は甚だ著しいものがある。其他の職業階級は一高一低あつて、甚しい變化を認めることが出来ない。歐洲戦争の興へた工業界の好況は、一方工業労働者の數を増したものがあつても、工業的小企業者及び工場役員の數をも激増せしめたものがあつて、大正四年以後中産階級は著しい増加を爲したものの、如くに思はるゝ。

## 第四章 月島に於ける出生

### 第一節 一般狀況

出生は最近大正六年中、男四三〇人、女三九四人、計八二四人である。之を同年末の現住人口に比するに、千に付二五・〇であつて、大正二―六年の五年間平均に比して低きこと一・六、東京市一般の歩合より低きこと〇・四である。しかし京橋全區の歩合よりは高きこと四・〇である。毎年八〇〇人前後を下して、五箇年間計四、〇九九人を算してゐる。體性の別を考ふるに、五年間に於ける出生女兒百に付き男兒は一〇五・六であるが、大正六年中の割合は一〇九・一である。(A第八表の一及二參照)

出生率は年々低下し行く勢を示し、その低下の度著しく、大正二年三年度に於ては東京市一般に比して高位を保ち居たるも、大正四年以後はこれ以下に低下してゐる。しかし京橋區一般に比しては常に高位を示してゐる。(A第八表の二參照)

出生は大正六年中、男三九〇人、女三六五人、計七五五人であつて、之を同年末の現住人口に比するに、千に付二二・九であり、大正二―六年の五年間平均の同一歩合より低きこと一・五である。之を東京市の同一歩合に比すれば〇・八低く、京橋全區のそれよりは三・四高し。(A第八表の一及二參照)

出生率は大正三年を除いて、年々低下の趨勢にあり。殊に大正五年以後は低下の度甚しきを見る

のである。(A第八表の二參照)

大正四五年以降、出生率及び生産率の著しき低下は、種々の原因の存すべしと雖、その最も主なる原因として考ふべきは、已に幾度も述べたるが如く、歐洲戦争による月島一般の工業界の勃興に伴ひて、未婚青壯年労働者の移住し來れるもの多く、爲めに現住人口の増加を來したのであるが、出生は之に伴はざるものあるの點にありと思はる、その一證としては出生及び生産の實數が甚しき低減を示さずして、殆んど同一數を維持しゐるを擧げ得るのである。

出生は大正六年中、男四〇人、女二九人、計六九人であつて、之を同年末現住人口に比するに、千に付二・一に當り、大正二―六年の五年間平均の同一歩合より低きこと〇・二であるが、東京市一般及び京橋區一般の同一歩合と比する時は〇・五乃至〇・六高し。(A第八表の一及二參照)

出生率は、東京市一般及び京橋區一般が漸く減少の傾を示しゐるに拘らず、月島に於ては一高一低を示しゐることは、注意すべき所であつて、出生千中死産の占むる割合が毎年高位を占めゐることは甚だ痛心すべきこと、云はねばならぬ。斯くて五年間に於ける同歩合は東京市一般の六七・一、京橋全區の六七・六に對して實に八〇・三の高率を示してゐるのである。(A第八表の一及二參照)

### 第二節 各島に於ける狀況

今出生の關係を各島別について考察せんとするに方り、此處に最も遺憾なるは、已に述べたるが如

く、其の性質上差異ある月島一號地と同一二號地とを區別して觀察し得ざることである。そは自分が取扱ひて、本調査の基礎となしたる内閣統計局の人口動態小票には月島を一區域と認めて、該兩地區の別を付し居ざるが爲めである。

佃島に於ては、大正六年中の出産の現住人口千に對する歩合、他の地域よりも高く、五年間平均に於ける同一歩合も亦他の地域に比して遙かに高い。これ此の地が比較的舊き社會生活を營みて、人口の異動比較的になきが爲めであらう。男女の權衡は、五年間に女兒百に付男兒八八・一であつて、女兒の數遙かに多きは著しき現象と云はねばならぬ。生産の歩合も、大正六年中に於て三島中最も高く、五年間平均の歩合も亦最高位にある。然るに死産の現人口に對する割合も亦常に高位にあることは、不都合なる現象と稱すべく、殊に出産千中死産の占むる割合が五年間に一〇〇・三てふ高率を示せることは、特に注意すべき點であると思ふ。(A第九表の一及二参照)

新佃島にては、大正六年中の出産の現住人口に對する歩合三島中、最低位にありて、五年間平均の同一歩合も亦最低位にある。これ蓋し此の地が労働者殊に不熟練労働者の居住地であつて、富の程度比較的に低く、殊に最近に至つて未婚労働者の來住せるもの多くして、現住人口の増加と出産とが相併行し得ざるものあるが爲めであると考へる。男女の均衡は五年間に女兒百に付、男兒一一五・七であつて、男兒數の異常に多きことは、佃島と反對的位置に立つものであつて、労働者(收入乏しき)

居住區域の一特徴と認め得ないであらうか。生産の歩合も大正六年中に於けるもの、三島中最も低きのみならず、五年間平均のそれも亦最低位にある。死産の現住人口千に付きその歩合も、佃島に次ぎて高く、月島の比に非ざることにも注意すべく、殊に出産千中死産の占むる割合が五年間に九一・五の高率にあることも留意を要する。之を要するに、新佃島は出生の關係に於て、最も不良なる徴候を呈するものとなすことが出来る。(A第九表の一及二参照)

月島は正に全島中、正中を占むるものと云ひ得る。勿論それは「全島中」に於ける話であつて、これを東京市一般及京橋區一般と比すれば、なほ不都合の状態にありと云はざるを得ぬのである。(A第九表の一及二参照)

### 第三節 出生と月

出産を月別となし、一年間の出産を千として、之れに對して各月の占むる割合を算するに、大正六年中に於ては一月最も高く一五五・三人、三月の一六・二人、二月の一四・一人、之に次ぐ、最も低きは四月であつて五三・四人、次いで低きは十二月の五九・五人である。之を五年平均と比する時は、大差なきも、一、二、三月の山一層高く、四月の谷少しく深きと、四月以後漸次に高まり行き、十一月に至つて第二の山嶺に達するを異にするだけである(五年平均にては四月以後は一高一低をなして、十一月に至つて第二の山の頂に達するのである)。東京市一般及び京橋區一般の趨勢と

比する時は、大正六年中にては、一、二、三月の高き山は三者其の趣を同じうし、第二の小山の頂も何れも十一月にあるけれども、谷の位置は夫々異り、東京市一般は日本全国の傾向と同じく、六月にあり、京橋區は七月にあれど、月島にては右の通り四月にある。五年平均について見るも、又同じでこの關係を認むることを得ねど、月島の四月に於ける谷の極めて深きは特に著しき點と云はねばならぬ。(A第一〇表の一及二參照)

生産については、各月の出産千中、生産の占むる割合に依つて、各月の消長を檢せんとした。先づ大正六年中の生産の占むる割合は、高低起伏甚し、蓋し生産の絶對値僅少なるが爲めに、かゝる結果を生じたものであらうが、年の初めに於ては出産の中生産の占むる割合高くして、漸次減少し行く傾向あることだけは之を窺ひ得るのである。六月及び九月に於て、其の割合最も低きが、これは同じく京橋區全體に就いても認め得る現象である。十一月の格段に低きは、これは特殊の現象ではあるまいか。次に五年間の合計の結果について之を見るに、三月が生産の割合最も高きことは、東京市一般、京橋區と共に月島も等しく之を示してゐるけれども、最も低き月は東京市及び京橋區にては、共に七月であるに拘らず、月島にては七月に於ては之を認むるを得ずして、却つて九月にあるといふことは如何なる理由に基くのであらうか。十二月は總體に割合低きが、月島に於ては特に低度甚しいものがある。一體に、月島は生産の占むる割合の月による高低に著しいものがあることを認め得らるのである。

あるが、それは殊に割合の低き方に著しきものがある。(A第一一表の一及二參照)。即ち月による出産千中、

死産の占むる割合が東京市全體、京橋區全體より遙かに高いことを語つてゐるのである。(A第一二表の一及二參照)

今出産と月との關係を各島について夫々別々に觀察するに先づ

佃島にては、其の出産の最高位は三月にあつて、次位は十月にあり、月島一般の最高位一月次位三月と其の趣を異にしてゐる。最低位七月にあつて一般の四月とは其の様子を異にしてゐる。生産が出産中占むる割合が一月、十一月、八月といふ順に高きは、月島一般と其趣を同じうしてゐるけれども、最低位が四月にあることは一つの特徴である。(A第一三表の一及二參照)

新佃島に於ける出産の有様は、東京全市のそれと其の起伏の甚だ能く似たものがある。たゞ第二の山の頂が八月にあることを異にするだけである。生産が出産中に占むる割合が、東京市一般の傾向と可成りよく似た點を見出し得るのであつて、唯だ五六月に於て、比較的低位にあるを異にするだけである。(A第一三表の一及二參照)

月島はその出産及び生産の割合、月島一般の趨勢を代表するものである。蓋し月島だけの出産數のみにて、佃島、新佃島のそれと合したるもの、倍數に及んでゐるのであるから、此の關係は寧ろ當

然のことであると思はる。(A第一三表の一及二参照)

#### 第四節 公生と私生

出産の千中、大正六年中に於ける公生、私生の占むる歩合を見るに、公生八八一・一、私生一一八・九であつて、東京市一般及び京橋全區に比して、私生出産の歩合遙かに低し。然れども五年間(大正二―六年)の私生出産を見るに、月島全般は遙かに京橋全區及び東京市一般の上であり、而して東京市一般は私生出産の割合年々減少し行くものあり、京橋全區は大正四年に最も低く、爾後又その割合を増加し行くに、月島に至つては減少の割合甚だ急激なるものがある。(A第一四表の一及二参照)

生産總數を公生、私生に分つて其比例を求むれば、大正六年中は公生九〇・二%、私生九・八%であつて、東京市一般及び京橋全區に比して、私生々産の歩合少きも、之を五年間について見るに、私生々産の歩合が大正二年に於ては最高位を占めたるに、かく大正六年に於ては最低位を占むるに至り、此月島一般の五年間平均に比して、一・九%公生高く、私生低く、私生々産の減少驚くべきものがある。歐洲に見たる出生減耗の前驅として、この私生々産の著しき低下てふ現象ありしを思はゞ、月島に於ける此の現象は注意すべき或物を語るものではあるまいか。(A第一四表の一及二参照)

死産に於ける公私生の比例を見るに、大正六年中に於ては、公生六五・二二%、私生三四・七八%であつて、其の私生の多きことは生産の比ではない。之を同年の東京市一般及び京橋全區の同一比例

に比するに、私生死産の割合最も低く、又之を月島一般の五年間平均の同一比例に比する時は、二・〇%公生高く私生低い。即ち此處にも私生の減少を認むることが出来る。(A第一四表の一及二参照)

公生出産中の生産死産の比例を徴するに、大正六年中には、生産九三・八%、死産六・二%であつて、五年平均の同一比例に比するに、〇・三二%を生産に於て減じ死産に於て増加してゐる。又私生出産中の同一比例を見るに、大正六年中の生産七五・五二%、死産二四・四九%であつて、五年平均に比し、二・九六%を生産に於て減じ、死産に於て増してゐる。乃ち公生、私生にも死産の漸く増し行くものあるを知るべく、日本全國の趨勢と逆行しゐるものあるは、如何なる故であらうか。(A第一四表の一、二参照)

各島別に就いて見るに、

佃島は五年間に於て出産、生産、死産中私生の占むる割合、三島平均に比して遙かに高く、三島中最高位を占めてゐる。又公生中、死産の占むる割合六・〇一%であつて、全島中最高位にあり、私生中の死産は二四・二四%であつて、中位にある。(A第一五表参照)

新佃島は同じく五年間に於ける出産、生産、死産中、私生の占むる割合三島中、中位に位し、公生中死産の占むる割合五・八八%であつて、全島五年平均の同一比例と同じ割合を示してゐる。私生中の死産は二七・四八%であつて、三島中最高位にあり、全島五年平均の同一比例と比すれば遙かにそ

れを越してゐる。

月島に於ける、五年間の出産、生産、死産中、私生の占むる割合は三島中、最低位にあつて、同島五年平均に比して何れも下つてゐる。公生中の死産五・八%、私生中の死産一八・九%であつて、三島中最低位にあり、全島五年平均に對して、何れもそれ以下である。(A第一五表参照)

#### 第五節 出生と父母の年齢

出生と父母の年齢について、大正二年より六年に至る五年間の有様を観察するに、

##### 一、出生と父の年齢

(a) 一般

出産につき全島五年間の有様を見るに、父の年齢二十歳以下は〇・二%、二十歳乃至二十五歳は五・一%、二十五歳乃至三十歳は二〇・八%、三十歳乃至四十歳は四三・八%、四十歳乃至五十歳は一七・〇%、五十歳以上は二・七%であつて、三十歳乃至四十歳に至つて突如として急増し其の前後とも格段の減少を示してゐる。(A第一六表の二参照)

出産児の體性別を考ふるに、父の年齢によつて男兒女兒の出産割合に殆んど差異なきを見るのであつて、只だ男兒は父の年齢が二十五歳乃至三十歳の部分の割合を少しく増し、女兒は二十五歳以下に於て少しく増してゐるだけである。(A第一六表の二参照)

佃島にては、最高位の三十歳乃至四十歳の占むる割合三島中最も低く、二十五歳以下及び四十歳乃至五十歳に於て全島中最も高位を占めてゐる。

新佃島にては、最高位の三十歳乃至四十歳及び二十五歳乃至三十歳が、全島中最も高い。

月島にては全島の有様と全く相等しいといひ得るのである。(A第一六表の二参照)

生産については、出産に就いて述べたと殆んど同一の關係を認め得るのである。(A第一七表の一及二参照)

死産について見るに、大體に於て出産と同一の關係を認め得べきが、出産にては二十五歳乃至三十歳が、四十歳乃至五十歳よりも高位を占めてゐたけれども、死産にあつては、その逆であつて、四十歳乃至五十歳の方が二十五歳乃至三十歳よりもその率の高きことを知り得るのである。しかしながら父の年齢不詳のもの凡べての中に於て最高位を占め居れるが、これは私生子の父として其の年齢不詳なるが爲めであつて、この内容如何によつては全體の上に甚しき變動を來すものである。故に今此處に述べたることも決して確定的の事柄とは云ひ得ないのである。(A第一八表の一及二参照)

又出産中、死産の占むる割合の父の年齢の各位に於ける位置も、同じく確定的斷定を下すを得ざるものであるけれども、二十歳以下が最も高位を占め、次いで四十歳乃至五十歳てふ順序であつて、出産の最高位を占むる三十歳乃至四十歳が第三位にあることは少しく注目し得る點である。(A第一

## 八表の三参照)

(b) 父の年齢と出生月

出産、月島に於ける出生月の有様については、已に一月三月二月てふ順序にて第一の高き山を作り、十一月にて第二の小丘を形作り、谷は四月にあるといふことを知つたのであるが、此の出生月と父の年齢との關係を考ふるに、先づ

二十歳以下は字數少きが故に一般的にいひ得ざるも、なほ二月三月に於て高き歩合を占めてゐる。

二十歳乃至二十五歳にては、三月一月二月てふ順序にて第一の高き山を作り、第二の小丘は、十月にあり、谷は七月にある。

二十五歳乃至三十歳にては、一月三月二月てふ順序にて第一の高き山を作り、第二の小丘は十月にあり、谷は五月にある。

三十歳乃至四十歳にては、一月三月二月てふ順序にて第一の高き山、十一月が小丘、谷は四月にある。

四十歳乃至五十歳にては、一月三月二月てふ順序にて高き山、八月に小丘、谷は四月にある。

五十歳以上にては、一月三月最も高く、五月最も低い。

之を要するに父の年齢、三十歳乃至四十歳が、月島の出生に於ける決定的勢力を占むるものであつて、一模型となすことが出来るのである。(A第一九表の二参照)

次に各月について父の年齢各位の占むる割合を考ふるに、

一月に於ては、年齢による配分に甚しい變動がない。

二月は五十歳以上が一年中にて割合の最も低き月であつて、三十歳乃至四十歳が少しく高き割合を占めてゐる。

三月は甚しい不權衡がないけれども、四十歳乃至五十歳が少しく割合を減じて、二十五歳乃至三十歳が少しく割合を増してゐる。

四月は大した變異がない。たゞ低き年齢に於て少しく減じ、高き年齢にて少しく増してゐるのである。

五月は三十歳乃至四十歳及び四十歳乃至五十歳が一年中に於て最も割合を多く占めてゐる月である。

六月は二十歳乃至二十五歳が一年中最も割合を多く占めて、三十歳乃至四十歳が一年中最も割合少き月である。

七月は各位の間に於ける分配に大した差のない月であつて、四十歳乃至五十歳の割合が少しく高く、二十歳乃至二十五歳が少しく低い。

八月も平常の月と云つてよい。

九月は四十歳乃至五十歳が一年中にて最も割合の低き月である。

十月は二十五歳乃至三十歳が一年中にて、最も割合の高き月である。

十一月は二十歳乃至二十五歳が一年中にて割合の最も低き月である。

十二月は五十歳以上の一年中にて割合の最も高き月である。(A第一九表の二参照)

生産については、其の各年齢について各月の有様は出産につきて述べたる所と殆んど大差を見ないのであるが、各月に於ける生産につきて、父の年齢各位の占むる有様を検するに、次の如きことを知り得るのである。

一月、三月、七月は平月である。

二月は五十歳以上の占むる割合が一年中にて最も低き月である。

四月は二十歳乃至二十五歳の占むる割合が年中にて最も高き月である。

五月は三十歳乃至四十歳及び四十歳乃至五十歳が最も高く、二十五歳乃至三十歳最も低き月である。

八月は四十歳乃至五十歳が可成り高き月である。

九月は二十五歳乃至三十歳が可成り高く、三十歳乃至四十歳及び四十歳乃至五十歳が一年中にて最も低き月である。

十月は二十五歳乃至三十歳が一年中にて最も高く、二十歳乃至二十五歳も可成りに高き月である。

十一月は三十歳乃至四十歳が可成りに高くして、二十歳乃至二十五歳が一年中最も低き月である。

十二月は五十歳以上の最も高き月である。(A第二〇表の二参照)

死産と父の年齢との組合は甚だ不確實性を有するものであることは、已に述べた所であるが、之れと出生の月との關係について大體を考ふれば、

- 二十歳乃至二十五歳は 七月に於て死産最も多く、
- 二十五歳乃至三十歳は 五六月に於て
- 三十歳乃至四十歳は 二三月に於て
- 四十歳乃至五十歳は 四六月に於て

(A第二一表の一及二参照)

出産中死産の占むる割合の多きは、

- 二十歳乃至二十五歳の 七月に於ける 一六・七%
- 四十歳乃至五十歳の 四月に於ける 一六・七%
- 五十歳以上の 九月に於ける 一四・三%
- 四十歳乃至五十歳の 六月に於ける 一四・〇%
- 二十五歳乃至三十歳の 五月に於ける 一三・九%



である。(A第二二表の三参照)

(c) 父の年齢と公生及び私生

出産中、私生の占むる割合は、二十歳乃至二十五歳は六・七%、二十五歳乃至三十歳は五・一%、三十歳乃至四十歳は二・七%、四十歳乃至五十歳は三・四%、五十歳以上は一〇・一%である。即ち、三十歳乃至四十歳が最低位にあつて、それより双方へ行くに従つて、私生の割合を増してゐる。しかし九八・八%で殆んど全部を私生によつて占めてゐる「不詳」の内容が判明せざる限りは、以上の説明は到底決定的意義を得來る譯には行かないのである。

生産についても、右の出産に見たる關係と殆んど同一のことを云ひ得るのである。

死産に至つては、五年間總數三二九の中、父の年齢不詳にして私生のもの實に一二一を占めてゐる。斯くの如くであるからこれよりして到底何物をも推論し得ないのである。(A第二二表参照)

二、出生と母の年齢

(a) 一般

出産につき、全島五年間の有様を見るに、母の年齢二十歳以下は五・一%、二十歳乃至二十五歳は二・四%、二十五歳乃至三十歳にては二七・一%、三十歳乃至四十歳は三六・四%、四十歳乃至五十歳は六・一%、五十歳以上は〇・二%であつて、二十歳以下より三十歳乃至四十歳に至るまでは漸次上昇し、四十

歳乃至五十歳及び五十歳以上に至つて急減してゐる。五十歳以上は殆んど稀である。これ父の年齢と大いに異なる所であるが、兩者とも三十歳乃至四十歳に於て最高點に達してゐることは同様である。しかし最頂點に於いても、父の年齢の割合が遙かに母の年齢のそれに勝つてゐる。(A第二三表の二参照)

生産兒の體性別を考ふるに、二十歳以下にては、女兒の方多く、二十歳乃至二十五歳及び二十五歳乃至三十歳にては男兒の方多く、三十歳以上は女の方多きことを示してゐる。(A第二三表の二参照) 佃島にては、二十歳乃至二十五歳が、二十五歳乃至三十歳よりも多き割合を占めてゐることは一特徴と認め得られるであらう。

新佃島及び月島に於ては、月島一般の勢と殆んど大差なしと云ひ得るのである。(A第二三表の一及二参照)

生産については出産に就いて述べたことを繰り返せば足ると思ふ。(A第二四表の一及二参照) 死産について見るに、これは大體出産に於けると同一の關係を認め得るのであるが、二十五歳乃至三十歳及び三十歳乃至四十歳に於ける死産の割合は、出産に於けるよりも低く、四十歳乃至五十歳に於てはそれよりも高くなつてゐることを異にする。唯だ佃島に於ける三十歳乃至四十歳に死産兒の多きことは注意すべき點である。(A第二五表の一及二参照)

又出産中、死産の占むる割合を見るに、四十歳乃至五十歳が最も高く一〇・九%を占めてゐるのであ

るが、佃島に於ける四十歳乃至五十歳が二二・二%、二十歳以下が一五・九%を示せるは注目し値する。其の外、月島の四十歳乃至五十歳の二一・二%、佃島の三十歳乃至四十歳の二〇・七%、新佃島の二十歳乃至二十五歳の二〇・六%も高さ部類である。(A 第二五表の三参照)

(b) 母の年齢と出生月。表の割合は、出生月別に出産、母の年齢二十歳未満にては、三月二月三月に第一の山あり、第二の小山は九月十月十一月にある。

二十歳乃至二十五歳にては、一月三月二月といふ順にて第一の山あり、第二の丘頂は十月にある。二十五歳乃至三十歳にては、二十歳乃至二十五歳と同様である。

三十歳乃至四十歳にては、第一の山は一月三月にあるが、第二の山頂は十一月にあるを異にする。四十歳乃至五十歳にては、第一の山の頂は三月にあり、第二の山は餘りに高くない。

次に各月について母の年齢各位の占むる割合を考ふるに、一月は二十五歳乃至三十歳が一年中にて比較的高き月であるが、年齢による配分に甚しい變動がない。但し二十歳未満が一年中最も割合の低い月である。

二月は二十五歳乃至三十歳の割合が少しく高き月である。三月は年齢による配分に甚しい變動の表はれぬ月である。四月は一年中にて二十歳未満の割合の最も高く、二十五歳乃至三十歳の最も低き月である。

五月は三十歳乃至四十歳及び四十歳乃至五十歳の一年中にて割合の最も高い月である。六月は二十歳未満の割合が高い月で、他の年齢にては大した變化がない。

七月は二十五歳乃至三十歳の一年中にて最も高い月である。八月は二十歳乃至二十五歳の一年中にて最も割合の低い時である。

九月は二十歳乃至二十五歳の一年中にて最も割合の高い時である。十月は二十五歳乃至三十歳の割合が可成りに高く、三十歳乃至四十歳が一年中にて最低の割合を示す月である。

十一月と十二月とは平順なる配分の月である。(A 第二六表の一及二参照)

⑤ 生産については、前の出産の場合と殆んど異なる所を見ない。(A 第二七の一及二参照) 死産と母の年齢とを見るに、二十歳未満は實數極めて少なきが故に斷定を下し得ざるものがあるが、死産の最も多き月は

- 二十 歳乃至二十五歳にては 九月
- 二十五歳乃至三十歳にては 二月
- 三十 歳乃至四十歳にては 一月より五月迄及び十二月
- 四十 歳乃至五十歳にては 二月

(A 第二八表の一及二参照)

又、出産中死産の占むる割合の多きは二十歳未満を除いては、

- 四十 歳乃至五十歳 六月に於ける 二三・五%
- 同 七月に於ける 二〇・〇%
- 同 四月に於ける 一八・八%
- 同 二月に於ける 一八・五%
- 二十 歳乃至二十五歳の 五月に於ける 一三・一%
- 同 十二月に於ける 一三・〇%
- 三十 歳乃至四十歳 七月に於ける 一二・六%

であつて、四十歳乃至五十歳の高き年齢の母が死産児を産する割合が多いことは、特に注目し値する點であると思ふ。(A 第二八表の三参照)

(c) 母の年齢と公生及び私生

出産中私生の占むる割合は二十歳以下は二七・五%、二十歳乃至二十五歳は一四・五%、二十五歳乃至三十歳は九・一%、三十歳乃至四十歳は九・三%、四十歳乃至五十歳は一五・七%、五十歳以上は三三・三%である。即ち二十五歳乃至三十歳を最低位として、それより双方へ向つて漸増して、一方は五十歳以上に至つて頂點に達し、他方は二十歳以下に於て頂點に達してゐる。(A 第二九表参照)

生産についても右と同様の關係を認むるのである。(A 第二九表参照)

死産に於ては、二十歳以下は八三・三%、二十歳乃至二十五歳は五九・五%、二十五歳乃至三十歳は三三・五%、三十歳乃至四十歳は二七・六%、四十歳乃至五十歳は二五・九%、五十歳以上は〇と云ふ如く、私生の占むる割合が母の年齢の進むに連れて漸減し行くを見るのである。(A 第二九表参照)

## 第五章 月島に於ける死亡

## 第一節 一般状況

大正六年中に於ける月島一般の死亡總數は男一、五五四人、女一、四一三人、計二、九六七人であつて、此の内死産を除きたる死亡數は男一、三八五人、女一、二五三人、計二、六三八人である。以下死産を除きたる死亡の状態につき觀察せんと欲する。これを同年末の現住人口に比するに、各千に付き男は一七〇・八、女は一八・八六、計は一七・八七に當り、之を大正二年乃至六年の五年間平均の同一歩合に比するに、男は〇・九四、女は〇・三一、計に於て〇・六七高く、又之を大正六年中の京橋區一般に比するに、男は一・一四、女は一・二二、計は一・一七高く、東京市一般に比するに男は一・三〇、女は〇・八五、計は一・一三低い。尙ほ月島一般の五年平均死亡率を東京市一般のそれと比すれば、男は一・八五、女は一・二三、計は一・五五低きも、之を京橋全區のそれと比する時は、男は〇・二九、女は〇・六一、計は〇・四三高いのである。乃ち知る、月島は死亡率高く、死亡率の低下も捗々しからず、男子のそれは寧ろ増高の傾を示すものあるを。(A第三〇表参照)

大正六年の死亡歩合を男女に就て比較するに、女一・七八高く、しかも此の女の高さ割合は漸く減少の傾向があつて、五年平均に於ては、女二・〇五であつたもの兎に角、斯く幾分の低下を見たのであ

る。しかも尙ほ女子の死亡歩合男子のそれに比して斯くの如く高きことは、誠に珍らしき現象であつて、その五年平均の女子死亡歩合の超過は京橋全區よりも東京市一般よりも、遙かに高いと云ふことは注意すべき點であると云はなくてはならぬ。これ移動の頻繁なる労働街區として、女の寄留に脱漏多く、男は之に反して退去せる寄留者の抹消を怠るものありて、人口を男を過大に女を過小に算するの已むを得ざるものありての結果と見るべきも、尙ほ此の土地には女を多く斃す何等かの原因の作用するものあるに非ずや、そは星野囑託の報告に俟たねばならぬのである。(A第三〇表参照)

大正六年の死亡について男女の權衡を見るに、女百に付き男一一三・〇に當り、五年平均の同一比例より高きこと、二・五である。而して五年平均は一・〇・五であつて、日本全國一般に比しては勿論、日本に於ける都市(五萬以上の)に比しても迥に高きを示すのである。これ此の土地には男の人口の甚だ多きことを語るものであつて、労働市區の一特徴と認め得るであらう。(A第三〇表参照)

## 第二節 各島に於ける状況

大正六年の死亡中の佃島にては男三三、女二九、計六一、新佃島にては男七三、女六七、計一四〇、月島にては男二〇八、女一八一、計三八九である。(A第三一表参照)

扱て佃島について見るに、之を現住人口に比すれば、各千に付き、男は二九・三六、女は二九・三八、計は二九・三七に當り、之を大正二―六年の五年間平均の同一歩合に比するに、各千に付き、男

は六・〇八、女は九・七五、計は七・八四高い。三島中死亡率最も高く、その増高の状態も極めて著しい。殊に女の死亡歩合の増加は特に注意すべき現象である。又大正六年に於ける死亡歩合を男女に就て比較するに、女〇・〇二高し。しかしこれを五年平均に見ると、却つて女の方三六・五低いのであつて、大正六年に至つて突如として女の死亡歩合の急増を見たのである。男女の權衡を見るに、女百に付き男一一〇・三に當り、五年平均の同一比例より低きこと一九・八である。此等は皆同島が近年に至つて著しく女の人口割合を増加せるを語るものであつて、此の現象は他の地域と一種異なる特徴を示し、此地の獨得の社會状態に因するものではあるまいか。(A第三一表参照)

新、同島に於ては、大正六年の死亡を現住人口に比すれば、各千に付男は一七・八八、女は二一・一一計は一九・二九に當り、之を五年間平均の同一歩合に比するに、各千に付き男は一・一八、女は〇・六三、計は〇・九一高い。三島中死亡率の中位にある所であつて、男の死亡率は漸増し、女のそれは漸減する傾向がある。男女による死亡歩合の差を見るに女三・二三高い。これ實に三島中最高位を占むるのみならず、かくの如き女子の死亡歩合の超過の著しきことは驚異に値するものと云ふべきである。男女の權衡を見るに、女百に付き男一〇九・〇に當り、五年平均の同一比例より高きこと三・四である。而して男の割合は漸増の傾を示してゐる。(A第三一表参照)

月島について、その大正六年の死亡を現住人口に比すれば、各千に付き、男は一五・八一、女は一七・二〇、計は一六・四二に當り、之を五年平均の同一比例に比すれば、男は〇・五一高く、女は〇・一八低く、計に於て〇・一九高きことを示してゐる。即ち三島中死亡率の最も低き所であつて、男女ともに死亡率の漸減を認むることが出来る。男女死亡歩合の差を見るに、女一・三九高いのである。新、同島の比に非ずと雖も、女子死亡率の超過せる著しいもの、一であること云ひ得る。男女の權衡を見るに、女百に付き男一一四・九であつて、三島中男の割合最も高きものであり、五年平均の同一比例より高きこと四・九である。これ、同地が男の人口の多くして、尙ほ漸く増加し行くことを語るものにはあるまいか。(A第三一表参照)

### 第三節 死亡と月

死亡を月別となし、一年間の死亡を千として、之に對して各月の占むる割合を算するに、大正六年に於ては、七月最も高く、一〇八・五人であつて、十月之に亞ぎ、一〇〇・〇人を占む。之を大正二一六年の五年平均に比するに、七月、十月の山何れも高し。元來月島全體の五年間の死亡月別を見るに最高は七月にて、之に次ぐは五月であり、その次は八月、十月である。然るに大正六年に於ては、十月激増して第二位を占め、八月、五月の順位となつたのである。(A第三三表の一及二参照)

一體に月島に於ては、七月に於ける死亡の割合、最高位を占むる傾あり、(京橋全區についても此の傾がある)。八月は却つて其れに及ばざるは如何の理由によるのであるか。

日本全國一般の常態としては、二月及び三月が割合高きものであるに、月島に於ては却つて一、三月は平常であつて五月が特に著しい増加を來してゐることは注意すべき現象であると思はる。即ち一、二月に於ては割合低く、三月より漸次上昇して五月に至つて一つの山頂に達し、六月は低下すれど、七月に至つて最も高き山頂に達し、八月、九月と低落して九月には著しき低下を見るのであるが、十月には更らに反撥して第三の山を形造り、十一月に最も深き谷を作るのである。即ち三山三谷あり、中央の山を高しとなすのである。(A 第三三表の二参照)

男女に就いて五年間の死亡月の有様を見るに、男の最も多きは五月であるが、女にては七月である。而して、女の作る七月の山は甚だ高く、男の五月の山は遙かに低い。一體に女の死亡は七、八月の間に集中すれど、男のは四、五、六、七、八月の間に分散してゐる。之を京橋全區と比例するに、先づ男にては京橋全區は七月最も高きに反し、五月は餘り高くない、却つて五月よりも一月、三月の方が高いのである。又東京市全體より見るに、七、八月の山最も高くして、一、三月の山之に次ぐのである。而して五月は低位を示してゐる。然るに月島にては、男の死亡者が五月に於てのみ特に高位にあるといふことは注意すべき點であつて、之に對する原因の探求は緊要事の中の一であると思ふ。次に女にては、京橋全區と比すれば、大體の傾向甚だよく似た所がある。しかし東京市一般の傾向とは異なる所が少くない。殊に東京市一般にては、七月も勿論高いけれども、八月の一層高いことが著

しく異なる所である。かく月島にては、女の死亡者が七月にのみ特に高位にあるといふことも注意に値する點であると云はねばならぬ。(A 第三三表の三及四参照)

今之を各島別について見るに、佃島にては、八月最高位にあり、十月之に亞いで、冬期は割合に少く夏期に多い。新佃島にては、三月と七月と共に最高位にあり、十月も亦高位にあつて、五月は寧ろ低位にある。然るに月島は七月最も高く、五月之に次いで、八月は割合に下位にあるのであつて、五月と七月とに其の死亡の昂進を見るのである。右の内佃島にては、男の死亡は五、八、十の三月に最も多く、秋期最も多く夏期之に次ぎ冬期最も少く、女のそれは七、四、八の三月に多い、夏期最も多く、冬期之に次ぎ、春期最も少く、新佃島にては男は八、十の二月に、夏期最も多く、冬期之につき、秋期最も少く、女は七、三の二月で、冬期最も多く、秋期之に次ぎ、春期最も少く、月島にては男の死亡は、五月最も高く、七月之に亞ぎ、春期最も多く、夏期之に亞ぎ、秋期最も少く、女の死亡は、七月最も高く、五月之に次ぎ、夏期最も多く春期之に次ぎ、冬期最も少いのである。

之を要するに月島全島にては、夏春兩期に死亡多く秋冬兩期に少いのである。而して男は春期に最も多く、女は夏期最も多し。秋冬兩期は死亡少さが、男にては秋期に最も少く、女にては冬期に最も少くなつてゐる。

男の死亡の中、季節による死亡に著しき差あるは新佃島であつて、夏期は極端に高く、秋期は極めで低く、春冬兩期は常態にある。佃島にては秋期の死亡男最も多く夏期之に次ぎ、月島にては春期最

も多くして、夏期之に次いでゐる。女の死亡中、季節による變動著しきものは、佃島であつて、夏期最も高く、春期最も低い。新佃島にては季節による差最も少くして、冬期のみ平常以上に高いのである。月島は佃島と同じ程に季節による變動の激しき所であつて、夏春高く、秋冬に低いのである。(A第三五表の一及二参照)

#### 第四節 死亡と年齢

月島一般に於ける大正六年間の死亡を年齢別となし、總數を千として之に對する分節比例を求むる時は、五歳未満にあつては一歳未満最も高く、年齢の進むに従つて遞減し行くを見るのである。五歳以上の各階級にあつては、三十歳以上四十歳迄最も多く、之に次げるは、五十歳以上六十歳迄である。之を大正二―六年の五年平均に比する時は、五歳未満に於ては、一歳未満は 一三・六、一歳以上二歳迄は 〇・四六の減少を示し、二歳以上五歳未満は却つて増加せる傾向がある。即ち二歳乃至三歳は 三・九、三歳乃至四歳は 三・八、四歳乃至五歳は 三・八を夫々増して居るのである。然しながら之を同年中に於ける東京全市の同一歩合と比較する時は、月島に於ける五歳未満の割合極めて高くして、即ち一歳未満に於て 二五・二、一歳乃至二歳にて 一七・四、二歳乃至三歳にて 一二・二、三歳乃至四歳にて 一〇・六、四歳乃至五歳にて 五・〇丈けの高率を示してゐるのである。而して月島一般の五年間平均と東京市一般のそれとを比較する時にも、その間に、甚しい差があつて、月島に於ける幼児死

亡者の高率を占むることを知り得るのである。(幼児死亡については後節特に述べる所あらんとする)。

五歳以上の各階級に就いて、大正六年に於ける死亡の割合と、五年平均のそれとを比較して、大正六年の比例の高きは、十歳以上十五歳迄、十五歳以上二十歳迄、二十歳以上二十五歳迄、及び五十歳以上六十歳、六十歳以上七十歳迄である。特に、少青年者の死亡の比例の増加せることは、注意すべき點であると思ふ。尤も、東京市全般に於ける十歳乃至二十五歳の少青年死亡者の割合も大正六年度に於ては過去五年間のそれよりも増加して、月島の増加の割合を超過してゐるのである。故に月島に於て最も注意すべきものは、實に五歳未満の幼児の死亡率の甚だ高いことであると云ひ得るのである。(A第三七表の一及二参照)

男女について、年齢別の死亡の状態を見るに、五歳未満に於ては、二歳未満にては男兒の割合女兒よりも高きが、二歳以上五歳迄は女兒が男兒に勝つてゐる。五歳以上の各階級について見るに、五歳以上四十歳迄は各階級とも女の死亡割合、男のそれよりも高く、四十歳以上にあつては、男のそれ女子それよりも高いのである。之を東京市一般の状態と比するに、男の死亡の有様は兩者殆んど趣を同じうすれども、女の死亡に於ては月島は、東京市一般と比して、五歳乃至四十歳の間に於て割合高く、四十歳以上に於て割合が低いのである。即ち月島に於ては青壯年婦女子の死亡が東京全市よりも其の割合が多いことを見るのである。この事は特に注意を要すべき點であると思はれる。(A第三七

次に三島について觀察するに、(五歳以下の小兒死亡については後述す) 佃島は高齢の死亡者割合に多きを占むるに、新佃島は全く之と反對に、青壯年死亡者の割合が高い。月島は三島中最も平衡に近い状態にあるのである。又之を男女別について考察するに、佃島にては高齢の死亡女甚だ多きを見るのであつて、同島が前に述べたる高齢死亡者多きことは、實にこの女の高齡者多きことによるのである。新佃島にては、男は比較的高齡の死亡者多きに、女は比較的青壯年の死亡者が多いのである。かくて前に述べたる同地區が、青壯年死亡者の割合多きことは、實にこの女子の青壯年死亡者多きことによるものである。月島に於ても、男には比較的高齡死亡者多きに、女には比較的青壯年死亡者多数を占めてゐることを認むることが出来る。(A第三八表の一、二、三及四参照)

#### 第五節 死亡と配偶關係

死亡者を配偶關係に依つて別ち、男女各別に總數に對する割合を算出すれば、大正六年中には男は未婚者 六三・三%、有配偶者 一七・九%、鰥 一五・三%、離別者 〇・六%、不詳 一・九%であつて、女は未婚者 六〇・三%、有配偶者 二二・三%、寡 一四・一%、離別者 一・一%、不詳 三・三%、に當つてゐる。之を過去五年平均に比すれば、未婚者及び離別者は男女とも低く、男の有配偶者及び鰥寡に於て高いのである。一體に未婚者は男女とも死亡の割合は減少の傾向あると共に、有配偶者のそれ

は男に於ては增高の勢を示すと共に、女にあつては減少の傾がある。鰥にあつては増減の傾向を認め得ないけれども、寡は漸増の傾がある様である。男の離別者のそれは減少の勢にあるに、女の離別者は增高の傾にあるのを見るのである。以上の事は寧ろ月島に於いて、最近結婚の割合増加したることを語るものではあるまいか。經濟的好況と労働者階級の結婚の増加てふ如き關係はなほ後章に述べんと欲する所である。(A第三九表参照)

尙ほ大正六年度に於ける月島の死亡と配偶關係とを東京市一般のに比する時は、男にては未婚者は三・六%高く、有配偶者は五・九%低く、鰥は四・六%高く、離別者は〇・六%低く、不詳は一・七%低い。女にては、未婚者は四・五%高く、有配偶者は〇・三%高く、寡は三・七%低く、離別者は〇・四%低く、不詳も〇・六%低い。即ち東京市一般と比すれば、尙ほ未婚者の死亡の割合高き有様である。(A第三九表参照)

次に各島につきこの關係を考察するに、五年間に於て、男の未婚者の死亡最も高きは月島であつて、最低は佃島である。女の未婚者は新佃島最高で、佃島最低である。男の有配偶者は、新佃島最高で、佃島が最低である。鰥は佃島最高で、新佃島が最低である。男の離別者は新佃島最高で、月島が最低である。女の未婚者は新佃島最高で、佃島最低である。女の有配偶者は、佃島最高であつて、新佃島最低である。寡は佃島最高で、新佃島最低である。女の離別者は、佃島最高で、新佃島が最低に



ある。この事は、佃島が年長の人口組織を有すると共に、新佃島が年少の人口組織を有し、月島が其の中位にあることを語るものではあるまいか。佃島に於ける鰥寡の死亡が特に目立つて多く、有配偶者のそれを超過しゐることは著しき現象であると云はねばならぬ。(A第四〇表参照)

死亡月別と配偶關係とを觀察するに、男の未婚者の死亡は五月最高にして、六月、七月之に亞ぐ、男の有配偶者にては最高十月であつて、四月之に次ぎ、鰥にては十月最も高く、一月之に次ぐ、男の離別者にては、十月、十一月最高位を占めてゐる。女の未婚者にては、七月最も高く、五月之に次ぎ、女の有配偶者にては十月最高にして、八月之に次ぎ、寡にては八月最高にして、十二月之に次ぎ、女の離別者にては一、二、七、十一月最高である。(A第四一表 A第四二表参照)

第六節 五歳未満の小兒死亡

大正六年に於ける月島一般の死亡總數千に對する五歳未満の小兒死亡は 四二五・四であつて、五年平均に比する時は 五・九低いのであるが、同年度に於ける東京市一般の同一比例と比する時は、高きこと 七〇・四である。月島と東京市一般との五年平均の同一比例を比較すれば、月島は實に高きこと 六〇・〇である。かく小兒死亡率の高きことは注意すべき點である。(A第四三表参照)

之を三島別について見るに、五年平均に於て五歳未満の小兒死亡者の比例新佃島最も高く、全島五年平均の同一比例より高きこと 一五・五である、之に次ぐものは月島であつて、全島五年平均のそれより高きこと 二・八である。然るに佃島は最も低くして、全島五年平均のそれより低きこと 五六・四である。これ佃島は已に述べたるが如く、高齢居住者の割合多きことの結果ではあるまいか。(A第四四表参照)

月島一般に於ける生産數千に對する一歳未満の乳兒の死亡比例を見るに、  
A第四七號 月島全島乳兒死亡表

摘 要	年 次					計
	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年	
生 産 數	七六〇	七六一	七六六	七〇六	七五五	三七〇
乳兒死亡數	一三五	一四五	一九四	一〇三	一五三	七三〇
生 産 數 乳兒死亡に對	一六四	一八六	二五三	一四六	二〇三	一九二

即ち大正六年に於ては二〇三の高率を示して、五年平均に比して一二の増加を示してゐる。之を同年に於ける全國の同一比例一七三に比する時は、實に高きこと三〇である。同じく大正二―六年の五年平均に見る時は、全國の同一比例一五六なるに、月島のそれは一九一を示し實に高きこと三五である。この事は誠に寒心すべき現象ではあるまいか。

今之を各島について觀察するに、

A 第四八號、月島に於ける乳兒死亡各島別表

生 産 數 乳兒死亡數 生産千に對し 乳兒死亡	島 別		計
	佃 島	新 佃 島	
二六九	八二四	二六七	三、七〇
五	一八三	四六三	七〇
二〇五	三三四	一七九	一九

即ち乳兒死亡の最も多きは新佃島であつて、全島平均を超ゆること三三である。之に反し月島は最低であつて、全島平均より低きこと一二である。三島に於ける富の程度、従つて生活程度の差がある結果を生むに至つたものであらうと思はれる。而して最低の月島さへなほ日本全國の同一比例を超ゆること實に二三である。之れも亦特に注目せねばならぬ點であると信ずる。

小兒死亡者の身分を検じ其の私生の割合を見るに大正六年に於ては小兒死亡千中、私生九九・六を占め、五年平均より低きこと三・二であつて、幾分減少し行く傾がある様である。而して三島中にては、新佃島最も高く一一七・四を示し、全島平均を超ゆること一四・六である（A 第四四表参照）。又其の年齢を見るに、一歳未満最も多く、小兒死亡千中一二〇・八を占め、最も低きは二歳以上三歳迄であつて、六一・九を示してゐる。（A 第四五表参照）

## 第六章 月島に於ける結婚

### 第一節 一般狀況

大正六年に於ける月島全島の結婚總數は一八三件であつて、同年末の現住人口千に對し五・五に當り、大正二、三、五、六の四年間（内閣統計局に於て人口動態中、婚姻及び離婚の小票、月島の部の大正四年分を廢棄したる爲め同年の婚姻及び離婚はその數を缺いてゐる）平均と同一歩合である。之を同年に於ける全國の同一歩合に比すれば低きこと二・四九%にして、又東京市の本籍人口千に對する結婚の割合に比すれば低きこと三・九七、京橋區のそれに比するも尙ほ三・五〇である。（A 第四六表、参照）

之を島別に見れば、佃島最も割合高くして、新佃島最も低く、全島平均より低きこと〇・六%である。（A 第四七表参照）

### 第二節 婚姻種別

婚姻の種類別にすれば、大正六年には普通婚姻一六六件、入夫婚姻八件、婿養子縁組九件であつて、總數百に就き夫々九〇・七%、四・三七%、四・九三である。之を四年平均に比すれば、普通婚姻は三・七四%を減少し、入夫婚姻と婿養子縁組とは何れも増加して、前者に於て一・四五%、後者に

於て二・二九%を増してゐるのである。文化の進歩と共に入夫婚姻も婿養子縁組も減少するを常態とすと云ふに、月島に於ては斯く寧ろ増高の傾あるは、如何なる理由に基くのであらうか。但し婚姻の總數多からず、且つ入夫婚姻及び婿養子縁組に至つてはその實數甚だ小である。これによつて結論を下さんことは、甚だ危険多きものであるけれども、しかし尙ほ其處には此地の一特徴を示すもの、存することを否み得ないのである。(A第四八表参照)

### 第三節 婚姻と月

大正六年の婚姻を月別となし、總數を千として分節比例を求むる時は、九月最高にして一二〇・二である。之に次ぐは、十二月の一・四・八、三月の九八・四である。而して最低は八月であつて、三八・七である。之を四年間の平均の同一比例に比するに、九月は四年平均にては第三位を占めゐるに、大正六年にては著しくその割合を増加して、第一位を占むるに至つた。八月は四年平均に於ても最低位にあるが、大正六年には更らに著しくその割合を低下してゐる。尙ほ同大正六年に於ける東京市一般の同一比例と比較するに、東京市一般にては三月最高位にして二月、十二月之に次ぎ、九月は寧ろ可成りに低き位地にあるのであるが、月島に於ては上述の如く九月最高位を占めて、十二月、二月の順となつてゐる。而して最低位も東京市一般にては七月にあるに、月島にては八月にあると云ふこと、東京全市にては、八月と九月との間には甚しい差が認め得られないのに、月島に於ては八月が一年中

の最低位にあり、九月がその最高位を占めてゐると云ふことは特に注意すべき點であると思ふ。尙ほ一年中の結婚月である二、三月と十一、十二月とを比するに、東京市一般では、前者の方に割合多いのであるが、月島にては後者の方に割合が高くて、しかも前者に益々低く、後者にいよゝ／＼高くなり行く傾がある様に思はるのである。(A第四九表参照)

### 第四節 婚姻と年齢

婚姻を夫妻の年齢別に見れば、大正六年に於ては、夫は二十歳未満〇・五五%、二十歳乃至二十五歳一五・三%、二十五歳乃至三十歳三四・四三%の最高に達し、三十歳乃至三十五歳二五・一四%、三十五歳乃至四十歳一二・〇二%、四十歳以上一二・五八%である。之を四年平均に比する時は、(二十歳未満は實數僅かに一なる故之を除く)二十歳以上二十五歳未満は減少し、二十五歳以上三十歳迄、三十歳以上三十五歳未満、三十五歳以上四十歳未満は増加を示してゐる。

而して更らに大正六年度に於ける東京市一般の同一比例と比する時は、二十五歳乃至三十歳にては東京市一般の方高きも、三十歳乃至三十五歳未満にては月島の方その割合が高いのである。即ち以上は月島に於ては男は東京市一般に比して更らに晩婚の傾向あるを示し、しかも尙ほ漸次早婚者を減少しつゝあるを語るものではあるまいか。

妻は大正六年に於ては十五歳乃至二十歳一二・〇二%、二十歳乃至二十五歳二七・一六%の最高に達

し、二十五歳乃至三十歳三五・六八%、三十歳乃至三十五歳一三・〇六%、三十五歳乃至四十歳六・五六%、四十歳以上五・四七%である。之を四年間平均に比する時は、十五歳乃至二十歳にては〇・三九%を、二十歳乃至二十五歳にては一・五三%を減少してゐるのであるが、二十五歳乃至三十歳に於ては三・七八%を増加してゐるのである。この事は女子が著しく晩婚に傾けるを語るものである。又次に之を大正六年に於ける東京市一般の同一比例に比較する時は、十五歳乃至二十歳にては三・一四%、二十歳乃至二十五歳にては一三・二四%低く、反之二十五歳乃至三十歳にては三・六五%、三十歳乃至三十五歳にては三・三二%高いのである。以て如何に月島に於ては婦人の結婚の晩れゐるかを知らることが出来るであらう。(A第五〇表、第五一表の一、二参照)

#### 第五節 婚姻と身分

婚姻者を婚姻せる縁事身分に依つて別ち、夫妻各別に總數に對する百分比を求むれば、大正六年に於ては、夫は初婚者八三・〇六%、離別者一〇・九三%である。之を四年平均に比する時は、夫にては初婚を極めて僅かに減少し、妻にては初婚者を少しく増加してゐる。しかし乍ら殆んど變化なしと云ひ得るのである。之を大正六年東京市一般の同一比例に比すれば、夫の初婚者は尙ほ〇・九五%高く、妻の初婚者は一・三八%低いのである。(A第五二表参照)

次に夫妻相互の身分によつて四年間の婚姻を分ちて觀察するに、全國都市一般の有様と大差なきを認め得るのである。(A第五三表参照)

而して初婚者中、夫は二十五歳乃至三十歳の三七・六一%最高であつて、三十歳乃至三十五歳の二三・〇二%、二十歳乃至二十五歳の二八・八〇%之に次ぎ、妻は二十歳乃至二十五歳の四三・六〇%最高であつて、二十五歳乃至三十歳の二二・七二%、十五歳乃至二十歳の二三・九七%之に次いでゐる。之を全國都市の同一比例と比する時は、全國都市に於ては、夫は二十五歳乃至三十歳最高位にあつて、第二位は二十歳乃至二十五歳、第三位は三十歳乃至三十五歳となつてゐるのであつて、月島に於ける其れが晩婚の傾あるを認め得るのである。妻も全國都市に於ては二十歳乃至二十五歳最高位を占むるけれども、第二位は十五歳乃至二十歳であり、第三位は二十五歳乃至三十歳にあつて、此の點に於ても亦、月島の晩婚を語るものである。(A第五四表の一及二参照)